



説教	主に向かって喜び歌い、御前に進み出よ	西村ひかり	1
教会の課題	座談会総括6/6 テーマVI 教勢の低下の中で、一団の教会として歩む 日本キリスト教会は、どのような将来像を描けるのか	山本 盾	2
旧約聖書に聴く	「原初史が語る人間と世界」(6) 「カインとアベル」	高松 牧人	3
憲法改正25年(第8、9条)	長老と執事の務め - 教会の将来を見据えて -	久野 牧	4
教会、この地とともに④	中会開催地まで新幹線で4時間超えの教会 - その現状、そして未来へ -	鈴木三穂子	5
コロナの現場⑥	キリスト教学校の現場より	長谷川洋一	6
コロナ禍の中で⑭	コロナ禍での「エア聖餐」	阿部 良香	6
み言葉に照らされて	御霊に守られて	中西 恵子	7
さんびかに生かされて	さんびに生かされて	大森 直子	7
こいのにあ	2021年度 神学校入学式 教会ニュース	安彦 晴樹	8



主に向かって喜び歌い、御前に進み出よ

全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。喜び祝い、主に仕え／喜び歌って御前に進み出よ。(詩編100編1節-2節)

にしむら
西村ひかり

詩編95編から100編は、礼拝の詩編です。そこでは、主なる神が全世界の王であることが繰り返され、その締めくくりの讚美と感謝の詩が100編です。この詩編によって、私たちは礼拝へと招かれます。

神さまは、まず「全地よ」と呼びかけられます。私たちの目に、たとえ教会がこの世の片隅の小さな群れにしか映らなかったとしても、全世界の王である神さまは、この教会を通して全地に語りかけてくださっています。私たちの讚美は、全地の讚美となります。

そして「喜び歌って御前に進み出よ」と呼びかけられます。神さまの御前に進み出ることが、礼拝の大切な要素です。個々が神に思いをはせるのではなく、主に養われる羊の群れが共に御前に進み出ることによって、「主こそ神である」ことを知るのでした。

イスラエルは、異教の偶像の神々に取り囲まれながら、神の招きの中で、「主こそ神である」ことを知る者として歩きました。私たちもまた、違った形で偶像に囲まれる中で生きています。経済や社会の価値観などにがんじがらめに縛られている私たちに、神さまは、「あなたたちはわたしのものだ」と語りかけ、偶像の中から引き出してくださいました。礼拝は、そのように、神さまと私たちの関係が正しくされる恵みの場です。

あるキリスト者へのインタビュー番組を見ました。礼拝が終わった直後、アナウンサーは開口一番「何を願ったのですか?」と尋ねました。礼拝は、人間が願い事を携えて行くもの、というのが一般的な考えだからでしょう。休まず礼拝に通う人は、よほどたくさんの悩みや願いを抱えていると思われ

ているかもしれません。しかし、私たちの礼拝は、こうした人間の思いや願いから出発するものではありません。神さまが「羊の群れ」を招き出し、神さまのものとして新たな一週を歩ませてくださるのでした。教会でさまざまな集いが持たれますが、神の招きの言葉で始められるのは礼拝だけです。人間の始めたものは人間の判断で終えることができますが、神さまが始めてくださったことを人間がやめることはできません。「この日」を喜びの日として主に仕えよと命じられているからです。

教会は、日曜日の礼拝を大切にします。日曜日が休日だから礼拝するわけではありません。安息日明けの仕事始めの日に、主の復活を喜んで集まり、祈り続ける中でこの日に聖霊が降りました。多くのキリスト者が、命を懸けて日曜日の礼拝を守り続け、この日を「主の日」として勝ち取ったのです。

神さまの招きに、私たちが喜び感謝するのは、「主は恵み深く、慈しみはとこしえに、主の真実は代々に及ぶ」からです。慈しみと真実は神さまの本質です。それを、御子キリストに見ることができます。十字架の苦難と復活の希望によって、慈しみを顕し、真実を成し遂げてくださいました。礼拝によって、私たちはこの救いの出来事を体験し、慈しみと真実にあずかります。

昨今の状況のなかで、主の日の礼拝は、当たり前前に守れるものではないことを思い知らされます。だからこそ、新たな思いをもって神の招きを喜び祝いたいと思います。感謝と讚美の歌をうたって御名をたたえる群れとして、共に喜び歩みましょう。

(室蘭教会牧師)